

実践的指導力の育成に向けた「教職実践演習」の研究

生 野 金 三

1 はじめに

教職に関する科目である「教職実践演習」は、平成22年度より新設科目として教職課程の中に位置付けられた。そこでは、教員としての最小限必要な資質能力の全体について、確実に身に付けさせるとともに、その資質能力の全体を明示的に確認する¹⁾ことを願っている。その「教職実践演習」の内容をめぐって、中央教育審議会の答申では、

- ① 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
- ② 社会性や対人関係能力に関する事項
- ③ 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
- ④ 教科・保育内容等の指導力に関する事項等の四者を含めることが適当であるとする²⁾。

以下においては、本研究の中核となる実践的指導力の育成と関わりのある④について見てみる。④には、「自ら主体的に教材研究を行うとともに、それを活かした学習指導案を作成することができるか。」「教科書の内容を十分に理解し、教科書を介して分かりやすく学習を組み立てるとともに、子供からの質問に的確に答えることができるか。」「板書や発問、的確な話し方など基本的な授業技術を身に付けるとともに、子供の反応を生かしながら、集中力を保った授業を行うことができるか。」「基礎的な知識や技能について反復して教えたり、板書や資料の提示を分かりやすくするなど、基礎学力の定着を図る指導法を工夫することができるか。」等の内容が含まれる。科目「教職実践演習」は、授業づくりより授業実践にいたる実践的指導力を身に付けることを願っている。

「教職実践演習」において、教員として必要な資質能力の育成に当たっての授業方法をめぐって、答申は、「役割演技（ロールプレイング）やグループ討論、事例研究、現地調査（フィールドワーク）、模擬授業等を取り入れることが適当である³⁾。」としている。ここでは、「教職実践演習」において模擬授業を導入するとしているが、これは教材研究、学習指導案・板書計画・発問計画・作業のプリント・教材等の作成等の授業設計より授業実施にいたる一連のことを受講者である学生に体験させることによって教師(教員)としての実践的指導力の基盤の育成を志向しているに他ならない。前述の如く「教職実践演習」においては、「教員としての最小限必要な資質能力の全体について、確実に身に付けさせるとともに、その資質能力の全体を明示的に確認する」とあるが、その資質能力の育成をめぐっては、「教職履修カルテ」を活用し、個々人の課題を設定し、その課題を解決する過程を通して資質能力・(実践的指導力を含む)を育成していくことが重要であろう。この科目の特色は、学生が「教科に関する科目」や「教職に関する科目」等の学習状況

を踏まえ、それぞれの到達状況を確認し、自己の課題を発見し、それを模擬授業等に等によって解決することにある。それは、「教職履修カルテ」の指標によって、個々人が教員に求められている資質能力を確認することから始まる。このようなことに鑑みると、**「教職履修カルテ」が如何に重要であるかが分かる。**

以上のことを踏まえ、本研究では、「教職履修カルテ」を活用した個々人の課題設定のあり様の研究、その課題を基に資質能力の力量を育成する方法の研究を目的とする。

2 本研究に関連する国内の研究動向

「教職実践演習」は、平成22年に教職課程に位置付けられ、短期大学では、平成23年より、4年制大学では、平成25年よりそれぞれ実践されている。この「教職実践演習」の実践や研究の動向を見てみる。

前者の実践の面では、「カルテについては、『教職実践演習』の授業の1回目に Web 上で入力させており」(京都地区私立大学教職課程研究連絡協議会 会報 第33号 2014年)、「課題を課すことによって対応」(同上書)、「学生がなかなか入力しないということもあった。」(京都地区私立大学教職課程研究連絡協議会 会報 第34号 2015年)、「履修カルテの活用です。ほとんど活用しないという大学も出てきました」(関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会 会報 第76号 2015年)、「教職履修カルテを活用せず課題の設定」(日本保育学会、ポスター発表 2016年5月)等の実践報告からも明らかなように、「教職実践演習」の本来のあるべき姿とは、乖離した状況にある。

一方、後者の研究の面では、①『「教職実践演習 (仮称)」の指導の在り方に関する研究」(福岡経大論集 第39巻 第1号)、②『「教職実践演習」の施行に向けた試行的実践(1)」(千葉大学教育学部研究紀要 第60巻 2012年)、③『自己成長を目指す教職実践演習テキスト』(原田恵理子編著 北樹出版 2014年)、④「全学教職課程における教職実践演習への取組(3)」(岡山大学教師教育開発センター 2015年)、⑤『「教職実践演習」のコース別演習として』(「きょう土をひらく」(小学校4年)、「国会のはたらき」(小学校6年生)等の模擬授業。日本教師教育学会 第25回研究大会 2015年)、⑥「教員養成の質保証に向けた教職実践演習のモデル開発に関する研究(1)」(同上書)等に関する内容が認められる。

上記の②と⑤は、課題を設定し、それを学習指導案の分析や模擬授業によって解決しているところに特色が認められる。②の場合は、「教員採用前に、自分の課題を自覚し、不足を補い、定着を図ることができるように設定されたものである。」とし、その課題を「教育実習で自分が実施した授業や学習指導案等を再分析し、学級経営や授業の指導案を作成できるように実践力を付けることを目指す」としている。そして、⑤の場合は、教師が「きょう土をひらく」(小学校4年)、「国会のはたらき」(小学校6年生)等の単元を設定し、その課題を模擬授業によって解決するという授業展開である。いずれも課題を設定し、それを解決することを通して、教員に求められる資質能力、とりわけ実践的指導力を育成しようとする点は共通している。しかし、ここで問題と

なるのは、教員に求められる資質能力、特に実践的指導力を育成するための個々人の課題設定である。短期大学では、1年半、4年制大学では、3年半それぞれ「教科に関する科目」や「教職に関する科目」履修してきている。その履修状況は、それぞれの授業科目が終了する直前、つまり第13回から第15回の間「教職履修カルテ」に受講者である学生に記入させることによって把握することが望ましいとされている。この期は、到達目標に従って進められた授業も終盤に入り、受講者である学生は、授業内容のほとんどを理解し、学習の成果や課題等を整理することができるからである。また、自己啓発のためにカルテを記入するという目的に鑑みると、各年度の終わりに必要な事項を記入する（教職課程認定申請の手引き）のである。このような作業によってこうして受講者である学生の「教職実践演習」へのモチベーションを高めることができる。こうした把握の観点より、先に掲げた「教職実践演習」に関する研究に目を転じてみると、いずれも「教職履修カルテ」を活用して、課題を設定し、それを解決するといった「教職実践演習」の研究であるが、「教職履修カルテ」を活用して、それを解決するといった「教職実践演習」の在り方とは異なる。

「教職実践演習」の実践と研究の動向を見てみると、「教職実践演習」において極めて重要な位置を占める「教職履修カルテ」の記入、そしてそれを活用して受講者である学生自身が自己の課題を設定するといった点とは異なっている。教員に求められる資質能力を身に付けるためには、四者の資質能力の具体的な指標（概ね30項目）を授業科目との関わりで、まず個々の学生が、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるかを明確にし、そして必要に応じて不足している知識や技能を、役割演技、グループ討論、事例研究、模擬授業等によって定着を図ることである。

3 「教職履修カルテ」を活用した課題の設定

1 「教職実践演習」の目的

- (1) 教育課程の履修や様々な活動を通じて、教員として最小限必要な資質能力が形成されたか明示的に確認する。
- (2) 教員になる上で自己にとって何が課題であるかを自覚する。
- (3) 不足している知識や技能を補い、その定着を図る。

2 「教職履修カルテ」の記入について

（「科目履修上のポイント」、「授業の力点」、「自己評価」、「学んだこと・課題等」を記入〈授業時の後半で、第13回より第15回の間〉させる。担当印）

(1) 「科目履修上のポイント」の欄

授業担当者は、授業の到達目標や授業内容を踏まえ、受講者である学生に理解させたい、確認させたい内容等を「科目履修上のポイント」の欄に記入させる。例えば、「保育内容（人間関係）」の場合、「①人間関係に関する指導案を作成し、それを基に模擬保育を実践することができる。②模擬保育の観察記録を基に、教育・保育の実際、指導のあり様を振り

返ることができる。],「教育課程論」の場合,「①教育課程編成の基本的な考え方を理解する。②指導計画の作成手順について考察する。],「初等教科教育法(国語)」の場合,「国語の授業を設計し,それを基に模擬授業を実践することができたかを確認する。逐語記録をとり,それをもとに授業を振り返ることができたかを確認する。」等の内容を,板書したり,口頭で伝えたり,パワーポイントで提示したりして,受講者である学生にしっかり伝える。

(2)「授業の力点」や「自己評価」欄

「科目履修上のポイント」に記入した内容と最も関わりを有する指標に二重丸(◎)や一重丸(○)を記入させる。そして,それぞれについて1~5の5段階で自己評価させる。

(3)「学んだこと・課題等」の欄

個々の学びの成果と課題等を記入させる。「教職履修カルテ」によっては,その書き方は,それぞれの指標ごとに個々の学びの成果と課題等を記入させる場合,項目1の内容を念頭に置いて個々の学びの成果と課題等を記入する場合とその方法は多岐に亘っている。

(4)担当印の欄

授業担当者が押印する。授業担当者は,それぞれの授業において「教職履修カルテ」を回収し,必要事項が記入されているかを確認した上で,押印する。その際,特に学んだことや課題等個々人の状況を把握しておくことよい。

押印後は,「教職履修カルテ」を受講者である学生に返却する場合があるが,その際,2年次の後期及び4年次の後期の「教職実践演習」の授業において,「教職履修カルテ」を活用することを念頭に置いて,それをコピーして大学で管理しておくことが望まれる。また,受講生である学生には,「教職履修カルテ」を紛失しないようにしっかり管理しておくことを伝える。

3 自己の課題設定の方法

「教職履修カルテ」に記入した「学んだこと・課題等」を基に,個々の学びの成果や課題等を整理し,それを基に自己にとっての不足する知識や技能等を明確にする。その際,以下の点に留意する。それは,

- ① 「教職履修カルテ」の指標を基に,これまでの学修過程を振り返り,整理しているか。
 - ② 4つの資質能力を踏まえ,自己にとって不足する知識や技能等を分析しているか。
 - ③ これまでの学修を振り返って教育・保育への興味や関心を持っているか。
- 等である。

【具体例】

以下は,受講者であるW・Mが,「教職履修カルテ」を基に資質能力をめぐって自己評価を行った内容である。それを踏まえて,如何に課題を設定し,その課題の解決をいかに行ったかを簡約する。

(1) 年次の評価	教職に対する意識	4・③・2・1
【教科に関する科目】		
【教職に関する科目】		
<p>「初等教科教育法（国語）」「特別活動の指導法」等の授業の中での実践を通して、ただ児童達に内容を理解させるのでなくねらいに従って内容を指導していくことの大切さを学んだ。そのためにも、教材研究の段階で教師はその内容を確り理解しなくてはならないと思った。</p> <p>そして、模擬授業の際に板書のとき、まだ習っていない言葉や漢字を使ってしまったことがあり、児童の学習状況を認識した上で、対応することの重要性も分かった。また、児童の反応を見ながら、それを生かし、発問や話し方を変えることで児童の積極性を引き出すことができ、主体的な授業を展開することができると思った。これらのことは「逐語記録」によってはっきりした。</p> <p>国語の授業は、一つの単元を学習するのに数時間かかるので、一単位時間で終わらないことが多い。実際の授業に置いては、導入の段階で前時学習の振り返り、つまり前時を復習する場面を組織し、しっかり思い出させた上で、本時の方向性を示し、授業を進めていくことの大切さを、模擬授業を通して感じた。このように本時の一連の流れが分かる児童は、授業に参加しやすく、積極的に発表したいと思えるようになることを、模擬授業を学習者として体験することによって気付くことができた。このようなことを生かして授業づくりをしていきたいと思う。</p>		
【不足している知識や技能】		
<p>授業づくりから授業実践という一連の流れについて学んだが、学習指導案の作成、発問計画の作成、板書計画の作成、ワークシートの作成等の授業づくりの力量については、他の教材や題材等において理解を深める必要があると思った。</p>		

「教職課程における自己評価」（「教職履修カルテ」の整理）を基に「教職実践演習」のあり様を志向し、授業を設計し、展開していくことである。

受講者である学生は、「不足している知識・技能」（「教職課程における自己評価」の欄）をめぐって、「学習指導案の作成、発問計画の作成、板書計画の作成、ワークシートの作成等の授業づくりの力量については、他の教材や題材等において理解を深める必要がある」と指摘している。このようなことは、他の学生も指摘している。こうしたことを踏まえて、ここでは学習指導案の意義や役割の確認という課題のもとに授業を組織した。まず、教材「スイミー」（小学校第2学年の文学的文章）の学習指導案（細案）を配布し、それについて解説を加えた。解説した内容はそれぞれ学習指導案の側注に掲げた。異なる教材の学習指導案（細案）について改めて解説を加えること（特に、「本時」を中核に据えて、「目標」「準備」「実際」〈導入→展開→終末〉等のそれぞれの内容を確認し、そして「目標」と「準備」と「実際」等との関連性、さらには「実際」〈導入→展開→終末〉の学習過程における「学習活動」と「教師の支援」との整合性等について触れた。）によって、受講者である学生は学習指導案の意義や役割を再認するであろう。加えて、学習指導案の一般的様式、つまり学習指導案の要素（単元観〈題材観〉、単元〈題材〉の目標、全体の指導計画、本時）についても理解を深めるであろう。その後、受講者である学生は、解説に従ってグループ毎に学習指導案等を作成し、模擬授業を行うに当たってグループ毎に作成した指導案が適切であるか否かを検討し、そして適切なものとなるように修正を加えた。

以下に、効果の一端を掲げる。①グループは、「児童の国語に対する関心を深めたり、思考力や想像力、言語感覚を養ったりするために分かりやすい良い授業を目指して学習指導案を修正した。」

とし、そしてその際「(1) 教材研究」、「(2) 思考場面の設定」、「(3) 指導法」の三者の観点より修正を加えている。次に、「(1) 教材研究」をめぐる効果を掲げる。

受講者である学生は、学習指導案を修正するに当たってまず以て教材研究の重要性（ポートフォリオにおいて）を指摘する。指導者である教師は、国語科の学習指導の媒体としての教材について、それが蔵する陶冶価値について、内容的、言表的、能力的な観点より徹底的に考察し基礎的理解を深める必要がある¹⁹⁾。このような把握の観点より①グループが修正した学習指導案に目を転じてみると、「教師の支援」①②④、「主な学習活動」③等からは教材研究の様相の一端を窺い知ることができよう。「教師の支援」①②では、「時間的順序」（「春になると」「二、三日たつと」）と「事柄の内容」の順序性や構造を捉えていることが分かる。教材「たんぽぽのちえ」は、花が咲いてから仲間を増やすために種を飛ばすまでのたんぽぽの仕組み（知恵）が時間的順序を追って述べられている（p110. 国語 学習指導書、2年上 たんぽぽ 光村図書）。その構造は、意味段落の冒頭に「春になると」「二、三日たつと」といった一定の時期や日数を示し、その後は時間の経過等を示し、そしてそれぞれ時期ごとに知恵（事柄）を述べるという関係になっている。その知恵は、たんぽぽの生長に従って順序よく述べられ、そして事象の変化とその原因や理由が分かりやすく述べられている。このようなことを踏まえて、①グループの修正した学習指導案を改めて見てみると、特に「主な学習活動」③では、教材研究のもと「たんぽぽの花と軸が地面に倒れる理由」が整理して掲げられている。ここからは、学習指導案作成に当たって①グループが教材の核・幹・枝等に相当する言語（言葉）を精選し、全体の脈絡を構造付け、重点化していることの一部を窺い知ることができよう。このような点からも①グループが教材研究の重要性を指摘したことは頷けよう。ここからは、教材観の育ちの一端が認められる。

4 特別活動における授業設計力～学習指導案の修正を通して～

前述した「教職実践演習」の事例を踏まえ、以下に特別活動（学級活動）の授業づくりについて考察を加えることにする。特に、学習指導案の修正を通して、教員に求められる資質能力、就中実践的指導力の基礎の育成について考察を加える。

ここでは、まず授業づくりの様相に触れ、次いで「教職履修カルテ」を活用した課題設定の様相を掲げ、最後にその課題の解決を如何に試みたかについて考察を加える。

1 授業設計力をめぐって

授業者は、常に質の高い授業を志向して授業を設計し、実践するよう心掛けることが重要である。その授業の質であるが、それは授業を受ける児童の質（立場）に依存していることは言うまでもないが、児童の質の違いにどれだけ対応した授業であるかということが授業の質を決定するという意味では、結局授業の質は授業者の質によるといわざるを得ない。授業設計者が即授業実践者となり得ることを念頭に置くと、質の高い授業を展開するためには、授業づくりの力量、つまり授業設計力を可能な限り高いレベルで体得しておくことが前提となる。その授業設計力は、単元や題材の研究、教材の研究、学習指導観、児童観等とその基盤となる力量、そしてそれを踏まえた学習過程の組織、学習指導案の作成、板書計画の作成、発問計画の作成、ワークシートの作成等の授業展開力を構想する力のことである。実践的指導力の基礎の育成に当たっては、上記の授業設計力（児童観を基盤とした）を受講者である学生が意識し、体得するような授業を展開することが急務である。

2 課題の設定をめぐる

受講者である学生は、「科目履修上のポイント」（学級活動の授業を設計し、それも基に授業の流れを説明することができたかを確認する。）（特別活動論）を基に、個々の学修の様相を「教職履修カルテ」（学んだこと・課題等）を記入した。そして、個々の学びの成果や課題等を整理し、それを基に自己にとっての不足する知識や技能等を明確にした。その様相を「教職に関する科目」において見てみる。

受講生 I・T の「教職履修カルテ」のまとめと課題

(1) 年次の評価	教職に対する意識	④・3・2・1
【教科に関する科目】		
【教職に関する科目】		
<p>「特別活動論」においては、学校生活をおくる上で、人間関係をどのように構築するのかという点から、重要となる事項について学び、そしてどのように指導するかということ学んだ。</p> <p>また、学習指導法に関係にする基礎的・基本的理論について学び、それは指導法への応用力の前提となる点でとても重要であると思った。</p> <p>さらに、学習指導案の形式や要素を学び、と同時に学習の過程についても学んだ。導入→展開→終末という学習過程にしたがって、児童生徒にわかりやすく教える授業展開の様子について学び、これを踏まえて学習指導案を作成することができたと思う。</p> <p>このような経験を生かして授業づくりをしていきたいと思う。</p>		
【不足している知識や技能】		
<p>学習指導案を作成するにあたり、児童生徒の考え方の傾向等の実態をとらえたり、問題解決の過程について検討する必要があると思った。学習指導案は、細部にわたって修正する必要があるということを改めて感じた。例えば、目当てを設定する際、児童生徒の日常の経験をどのように切り取って導入の段階で提示するか、それをもとに本時の目当てをどのように設定していくかなど課題がある。とにかく、授業を設計する能力を育む必要があると思った。</p>		

ここで受講者である学生 I・T は、「不足している知識・技能」をめぐる、「目当てを設定する際、児童生徒の日常の経験をどのように切り取って導入の段階で提示するか、それをもとに本時の目当てをどのように設定していくかなど課題がある。」と指摘している。導入の段階における目当ての設定をめぐるには、他の学生も「ねらいを明確にしておくことで、授業を進めていくとき、そこにたどり着くために様々な工夫を講じることができる。」(A・T)と指摘している。また、展開の段階をめぐる、「どのように指導するかを考えることが重要であると思った。」(A・T)、「考えさせる場合、しっかりその手順を示すこと、といったように指導法を工夫する必要があると思った。」(S・T)、「児童に体験を基に思考させる場面を設定することが重要である。『主な学習活動』と『教師の支援』との整合性が図れていないように思う。」(T・N)等を指摘している。

受講者である学生 I・T は、導入の段階における目当ての設定の仕方のあり様の検討（児童生徒の実態を踏まえた）、そして展開の段階における内容の深化のあり様等と指導法をめぐるの課題、さらには指導案の書き方等めぐるの課題を掲げている。

3 課題の解決（実践的指導力の基礎の育成の向けて）をめぐって

前述した「履修カルテ」のまとめ、「不足している知識や技能」をそれぞれ確認し、それを踏まえて学習指導案の改善という課題のもとに授業を組織した。それは、導入の段階での目当ての設定のあり様、展開の段階での思考深化のあり様、「主な学習活動」と「教師の支援」との整合性等と学習指導案の書き方をめぐって、多くの受講者が指摘しているからである。

まず、「特別活動の学習指導案(細案)」（わすれものをしないようにしよう。）と「学習指導案の形式」に関する資料を配布し、特に「題材の設定の理由」「本時のねらい」を踏まえて、「実際の「導入→展開→終末」のそれぞれの過程の書き方について解説を加え、そしてねらいを達成するために「主な学習活動」、「教師の支援」は適切であるか否かを検討し、修正するように指示した。

以下に受講生である学生が個々に修正した学習指導案の一部を掲げ、考察を加える。

●受講者 I・T が修正した学習指導案の一部

【本時】（避難訓練）

(1) ねらい

地震が発生した場合のことを想定し、秩序正しく安全に、且つ迅速に避難する態度を育てる。そして、安全意識を高める。

(2) 実際

教師の支援（修正前）	教師の支援（修正後）	備 考（説 明）
<p>【導入】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿題にしていたビデオの感想を発表させることで、災害に対する準備や訓練の重要性を気づかせる。 ・本時の目当てを短冊にて黒板に提示することで目的意識をもたせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・避難訓練のビデオや写真をみせ、突然起こりうる自然災害（地震）に対してどのような備えておくべきか、また学校生活を送る上でどのように事前に対策をとるべきかを考えさせる。そして、避難訓練の重要性に気づかせる。 ・本時の目当てを短冊で提示し、音読させ、ワークシートに書かせる。そして、本時の目当てを意識させる。 	<p>「訓練の重要性を気づかせる」と教師の支援に記していたが、具体的な手立てが不足していた。実際に生徒に自然災害（地震）が起きた時の様子を生徒にみせて、災害に対する備えを考えさせることによって避難訓練の重要性に気づかせることが大切であると思った。発表に対する指摘を受けて、指導法の工夫が必要であると思った。</p> <p>本時の目当ては「避難訓練の大切さを知り、その訓練の仕方を体験しよう。」である。導入の最初の段階のビデオや写真と関連付けて、目当てを音読させたり、ワークシートに書かせたりすることによって、避難訓練に対する意識を持つことができ、またその重要性に気づかせることができると考えた。このように学習指導においては、手立てを講じるのが重要であると思った。</p>

●受講者A・T修正した学習指導案の一部

【本時】(チャイム着席)

(1) ねらい

チャイム着席の意義を理解し、協力しながらチャイム着席を心がけることの必要性を理解し、時間を守りながら行動しようとする態度を育てる。

(2) 実際

過程	主な学習活動	教師の支援
展開	3) チャイム着席ができない(チャイム後)原因を考え発表する。 ・トイレをしていて遅れる。 ・話をしている遅れる。 ・時間を見て行動していない。	・チャイム着席ができない原因、困ったことを発表させる。



教師の支援(修正前)	教師の支援(修正後)	備考(説明)
【展開】 1 チャイム着席ができない原因、困ったことを発表させる。	1 まず、なぜチャイム着席ができないのか個々で考えさせ、その後グループごとにチャイム着席ができない原因、そして出来なくて困ったこと等を考えさせる。その際、どんな場面であったかを思い出させる。発表させ、それを黒板に書かせる。	導入の段階で「チャイム着席ができない原因などを発表させる。」と記したが、ここではどのような手順で考えさせ、発表させるか具体的に記されていない。考えさせる場面でも、どんな点から考えさせるかについて記されていない。思考させる場面を設けること、それに指導法を工夫する、などがとても重要であると考えた。このようにすることで、生徒は学習に対して興味や関心を持って取り組むであろうと思った。発表に対する指摘を受けて、指導法をもう少し工夫する必要があると思った。

●受講者T・Sが修正した学習指導案の一部

【本時】(忘れ物指導)

(1) ねらい

忘れ物をする原因について考え、それをもとに忘れ物をしないための方法を考え、忘れ物をしないことの大切さに気付くようにする。

(2) 実際

教師の支援(修正前)	教師の支援(修正後)	備考(説明)
【展開】 ・なぜ忘れ物をするのか、その時どういった状況であったかを児童に考えさせ、発表させる。 ・準備、確認を怠っていないかを調べさせる。	・忘れ物をした時、その日の朝の様子、前の夜の様子をそれぞれ想起させる。具体的には、「登校前に今日の学習内容を確かめたか。」「前の夜に時間割を確かめたか。」等と問うて考えさせる。	「……調べさせる。」と書いたが、具体的な場面を掲げ、その時の様子を考えさせることが重要であると考えた。忘れ物をした理由について、具体的な手立てを講じて、思考させる場面を設定することにした。また、ここでは、「主な学習活動」と「教師の支援」との整合性がはかれていなかったため、そのことも考えて修正した。

● 受講者 S・T が修正した学習指導案の一部

【本時】(忘れ物指導)

(1) ねらい

忘れ物をする原因を理解し、忘れ物をしないようにするための対策を考え、忘れ物をしないという態度を育てる。

(2) 実際

主な学習活動（修正前）	主な学習活動（修正後）	備 考（説明）
<p>【展開】</p> <p>3 忘れ物をした原因を考えさせ、近くの人とその理由について意見を交換する。</p>	<p>3 アンケートを基に忘れ物をした原因を考え、それを基にグループで話し合う。原因をプリントまとめる。</p>	<p>・「おもな学習活動」の書き方は、文末を「する。」と書かなければいけないのに、そのように書かなかった。忘れ物について考えさせる場合、具体的手立てを講じなかった。それは「プリントにグループでまとめる。」ということである。考えさせる場合、しっかりと手順を示すといった指導法を工夫する必要があると思った。そうすることで児童は主体的に活動の取り組むことができると思う。</p>

1 「導入段階での指導」について

各教科における導入段階は、学習への動機付けを重要視する観点より既習内容との関わりにおいて本時の目当てを設定していくのが一般的である。しかし、特別活動や道徳等においては、一単位時間で学習指導が終了するケースが多いので、導入の段階での学習への動機付けは多少異なる。特別活動や道徳等の目標が実践の態度の育成を志向している故、児童生徒の日常生活経験を重要視した学習への動機付けが行われる。斯様のことを念頭に置いて、I・Tが組織した導入の場面に目を転じてみると、まず「避難訓練のビデオや写真をみせ、……」とあるように生活経験の内容を切り取って提示し、それを基に学習の目当てを設定（本時の目当てを短冊で提示し、……）している。ここでは、既習の知的経験を基盤に新たな課題の設定によって知的好奇心を喚起し、学習者の探求行動を誘っていかうとする立場である。その特色は、主体の内側に想定する動機の発現の重みを置いている。したがって、これは内的動機付けと称することができよう。内的動機付けは、環境内の事物やそれについての観念の有意義な関係を知ろうとすることから生じたり、知的好奇心から生じたりする動機付けである¹⁹⁾。

導入の段階での教授行動を見てみると、既習事項を基に学習に対する必要感を持たせ、そしてそれを基に「如何なることを学習するのか。」という方向で問題意識を高めようとしている。具現すれば、自然災害（地震）が起きた時の様子をビデオや写真によって提示し、避難訓練の重要性に気付かせようとし、そしてそれを踏まえ、短冊によって学習に目当てを提示し、視覚に訴えたり、音読させたり、ワークシートに書かせたりして学習の目当てを意識付けている。指導法という観点より導入段階を見てみる。受講者 I・T は、「修正後」の「学習指導案」に「……目当てを短冊で提示し、音読させ、ワークシートに書かせる。」としているように、学習者である児童生徒が

学習の仕方をしっかり理解するようにその方途を提示している。「備考(説明)」の部分に「学習指導においては、手立てを講じることが重要であると思った。(イ)」とあるように指導法の工夫が認められるが、これをめぐってI・Tは、ポートフォリオにおいて「受講者である生徒が主体的に学習に取り組む点から、可能な限り学習方法を具体的に提示することが重要である。」と指摘している。

2 「展開段階での指導」について

A・T、T・S、S・Tの三者に展開の段階における指導の様相を見てみる。いずれも導入の段階で設定した学習の目当てを解決するという課題解決に過程をとっている。ここでは、学習の目当てを解決するに当たって、学習者である児童生徒に考えさせる場面、グループで検討する場面等を設定している。具現すれば、忘れ物指導をめぐっては、「登校前に今日の学習内容を確認めたか。」(教師の支援)。「アンケートを基に忘れ物をした原因を考え」(主な学習活動)とあり、そしてチャイム着席をめぐっては、「なぜチャイム着席がでないのか個々で考えさせ」(教師の支援)とあり、学習者である児童生徒に思考させる場面を設けている。また、チャイム着席をめぐっては、「グループごとにチャイム着席ができない原因」「発表させ、それを黒板に書かせる。」(教師の支援)とあり、そして忘れ物指導をめぐっては、「グループで話し合う。」(主な学習活動)とあり、学習者である生徒にグループで検討させる場面を設けている。

修正後の「教師の支援」や「主な学習活動」の部分に目を転じてみると、受講者A・Tは「発表させる。」を「個々で考えさせ、その後グループごとに……考えさせる。……発表させ、それを黒板に書かせる。」と修正し、また、受講者S・Tは「考えさせ、」を「アンケートを基に……考え、グループで話し合う。」と修正しているように具体的な手立てを講じ、児童生徒が主体的に取り組むように指導法を工夫していることが分る。それは、受講者A・Tが「発表に対する指摘を受け、指導法をもう少し工夫する必要があると思った。」と指摘していることから理解できよう。そのことは、受講者A・Tが「備考(説明)」の欄で「発表に対する指摘を受けて、指導法をもう少し工夫する必要があると思った。」と指摘していることから理解できよう。

更に、「主な学習活動」と「教師の支援」との整合性という点についても触れている。受講者T・Nは「本時の展開の書き方で『主な学習活動』と『教師の支援』との整合性が図れていないと思う。」とし、そして受講者T・Sは「『主な学習活動』と『教師の支援』の整合性がはかれなかったので、そのことを考えて修正した。」と指摘している。「教師の支援」の部分では、学習活動について指導上、特に注意する点、思考を誘発するための指導上の留意事項を述べる。具現すれば、教材提示の方法、集団形態や集団活動の指示、指名の方法、個別への対応、学習習慣の形成等について述べる。このような点からも「主な学習活動」と「教師の支援」との整合性を図ることは重要なことである。

更に又、「主な学習活動」と「教師の支援」の書き方についても触れている。これは学習指導案を作成する際の基本的なことである。

5 おわりに

「教職履修カルテ」を基に受講者である学生は個々の課題を明確にし、そしてその課題の解決を志向しプレゼンテーションのために作成した学習指導案に修正を加えた。先の考察（「導入段階での指導」についてや「展開段階での指導」について）を基に受講者である学生の意識がいかに変容したのかについて見てみる。

受講者である学生は、「児童生徒の立場」をより意識して授業を構想している。例えば、受講者 I・T が「具体的な手立てが不足していた。実際に生徒に自然災害（地震）が起きた時の様子を生徒にみせて、災害に対する備えを考えさせることによって」とし、又受講者 A・T が「指導法を工夫するとなどがとても重要であると考えた。このようにすることで、生徒は学習に対して興味や関心を持って取り組むであろうと思った。」としていることからそのことは分かる。授業を設計する際には、単元、題材及び教材に対する児童生徒の実態、そして学習に対する一般的な傾向を述べる。具体的には、児童生徒の学習内容に関する知識、理解等の実態、学習内容に関する関心、意欲、態度等の傾向、学習内容に関する見方、考え方等の傾向を把握する。児童生徒観は、その教育の在り方を基本的に方法付けるものであるからである。こうしたことに受講者である学生が気付くことは極めて重要である。前述した受講者 I・T と受講者 A・T は、その一端に気付いている。この背景には、これまで「児童生徒の立場」よりそれぞれのプレゼンテーションを聞くという体験があったためである。「児童生徒の立場」と「教師の立場」とを重ね合わせて授業を構想していることは、「学習者に分らせるためには如何に対処すべきか。」「如何に学習者を主体的に学ばせるか。」「如何なる授業が学習者に魅力があるのか。」等について思いをめぐらしてのことであろう。これらは、主に児童生徒観に鑑みた指導の方途に関する内容である。

受講者である学生が授業科目との関わりで、将来教員になる上で、自己にとって何が課題であるかを明確にすることは極めて重要であるが、それは容易でない。前述した教員に求められる資質能力の四者の内容にはそれぞれ多岐にわたる事項が含まれているからである。そこで、その四者の内容を、項目 1、項目 2、指標等とし、受講者である学生が個々の学習の状況を指標に従って確認し、チェックし、学んだことや課題等を整理することができるようにしたのが「教職履修カルテ」である。つまり、「教職履修カルテ」は受講者である学生が個々の資質能力の全体を明示的に確認するためのものである。ここに「教職履修カルテ」の重要性が存在する。

児童生徒理解を踏まえた学習指導案の作成、指導観等の授業を構想する力等の授業を設計する力について見てきた。ここには、教師としての児童生徒観、指導観等の授業観が基盤となっている。この授業観は、教員に求められる実践的指導力の基礎の一端である。

しかし、教員に求められる資質能力の基礎の育成という点から見ると課題もないわけではない。例えば、「目当て」である問題を解決するに当たっては「如何なる方法で学習するのか」という「学習の仕方の指導」を「学習の目当ての提示」のあとに位置付けることである。自ら学ぶ児童生徒は、学習の仕方をしっかり身に付けている児童生徒であると言及されていることから極めて重要なことである。

こうした課題を含め、課題設定からその解決についてはまだ多くの課題が認められる。このような課題をめぐっては、稿を改めて論じることにする。

【注】

- (1) 中央教育審議会の答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」平成18年
- (2) 同上書
- (3) 同上書
- (4) 飛田多喜男・国語教育実践理論の会 『誰にもできる国語科教材研究法の開発』 明治図書
21頁
- (5) 東洋他編 『授業改革事典 3 授業の実践』 第一法規 35頁

本稿は、「道私教協の研究助成」を得て成ったものである。記して感謝申し上げます。